

# 常陸の後期古墳の様相

阿久津久片平雅俊

## はじめに

1. 後期前方後円墳の成立
2. 前方後円墳を含む古墳群と埋葬施設

## 3. 横穴式石室と箱式石棺

4. 横穴墓とその終末
- まとめ

### 論文要旨

茨城県は6世紀前半頃になると霞ヶ浦を中心とした地域と、県西、県北の地域にそれぞれの特色が現れる。霞ヶ浦沿岸では、三昧塚古墳にみられるような箱式石棺を埋葬施設に使い始めてから、この地域は、箱式石棺が主流となり、後期前方後円墳、円墳に設置されている。このような系譜をもつ地域の中に、僅かであるが、前方後円墳では出島村風返稻荷山古墳、大師の唐櫃古墳（彩色壁画）、三昧塚古墳に近く沖洲古墳群に入る大日塚古墳、円墳では桜川村前山古墳には横穴式石室が設けられており、この地域での特殊性を示している。

一方、県西北部から県北にかけては、前方後円墳、円墳とも横穴式石室が主流となり、箱式石棺は少なくこれに横穴墓が加わる。前方後円墳に箱式石棺が使用されているのは久慈川流域にある大子町仲山3号墳にみられるが、この古墳群は、むしろ那須地域の影響を受けたものと考えている。

トータル的に分けた2つの地域のうち、後者の地域と筑波には、方墳に横穴式石室をもち、一部に壁画が描かれるものが7世紀前半頃に共通して現れる。新治国内では関城町船玉古墳（彩色壁画）、筑波国内ではつくば市佐渡ヶ岩屋古墳、那珂国内では水戸市吉田古墳（線刻壁画）がある。これに加えて勝田市虎塚古墳の横穴式石室のように後に改装して彩色したものや、高国の日立市かんぶり穴横穴墓（彩色壁画）のように特異な性格をもつものがある。

この頃、国府がおかれた石岡市の南、千代田村の境に流れる恋瀬川を中心に群集墳が形成される。古墳形状は円墳、変形小型前方後円墳などバリエーションがみられ、箱式石棺が主体となっている。また、佐渡ヶ岩屋古墳のある平沢・山口地区には、円墳に横穴式石室と、箱形横穴式石室がみられ、この箱形横穴式石室は、新治村武者塚古墳、土浦市石倉山古墳の地下式箱形横穴式石室に共通するものである。この形状は千代田村粟田栗山群集墳にもみられる。

これらはいずれも7世紀後半にみられるもので、常陸国府が石岡の地におかれた素地をこの終末期の群集墳の中に求められるようである。